文部省昭和56－57年度科学研究費補助金による一般研究（B）　課題番号56450054
話しことばの構文の記述に関する日本語教育学的研究　研究代表者野元菊雄
研究報告書

動詞に対する格の顕現

68

文部省昭和56－57年度科学研究費補助金による一般研究（B）　課題番号56450054
話しことばの構文の記述に関する日本語教育学的研究　研究代表者野元菊雄
研究報告書

動詞に対する格の顕現

国立国語研究所
67434
図書館

研究分担者　国立国語研究所　石井　久雄

本報告は、文部省昭和56－57年度科学研究費補助金（科学研究費）による一般研究（B）「話しことばの構文の記述に関する日本語教育学的研究」（研究代表者野元菊雄）の成果をまとめたものである。

本研究は、科学研究費補助金交付申請の目的および実施計画に従って、遂行された。すなわち、日本語教育においては話しことばの教育の水準は高いとは言い得ず、その水準を高めるためには日本語の話しことばの研究の水準を高める必要がある。この観点に立つわれわれの従来の研究により、特に話しことばの構文については、「正格（appropriate)」であると一見考え易いものであっても逆に「破格（inappropriate)」であることがあり、文脈・随伴行動・場面が大きく効果する、という事実のあることが予測されるに至った。本研究は、その予測を組織的かつ実証的に解明しようとしたものである。具体的には、話しことばの構文特に動詞述語構文について、文法自体としての制約、およびそれに加わる文脈・随伴行動・場面の諸制約を、検討したものである。

本報告の標題は、抽象的な研究課題にそのまま従うよりは、具体的な実施計画・経過に従った。検討した動詞構文すべてを論述することは諸般の理由で不可能であるので、本報告の内容全体は、命題

現代の標準的な日本語の話しことばにおいて、動詞に対し、その主要な格の関係に立つ語句は、その全部が同時に顕現することがあまりない

を実証することを課題とし、後半においては或る種の動詞についてその構文を記述し、前半においてはその具体的記述を中心とした問題点をまとめた。本研究の実施計画・経過と本報告の課題との間には懸隔があるという批判もあり得るであろうが、その批判に対してもし弁明を行なうとするならば、すなわち本報告を呈示するということになる。本報告書の執筆は研究組織全体の意見を調整して研究分担者石井久雄が当たり、扉の記名はその責任の所在を明きらかにしたものである。

内容

I. 課題 —— 予備的分析 ・・・・・・・・・・・ 01

1. 一連の発話における全動詞について ・・・ 01
2. 課題の構成 ・・・・・・・・・・・・・・・ 05

II. 資料 —— 立証の領域 ・・・・・・・・・・・ 07

1. 資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 07
2. 課題立証の領域 ・・・・・・・・・・・・・ 09

III. 記述に関わる諸問題 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

1. 動詞の実質性と形式性 ・・・・・・・・・・ 11
2. 格の認定 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
3. 動詞の態 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
4. 構文と脈絡 ・・・・・・・・・・・・・・・ 16

IV. 動詞に対する格の顕現 ・・・・・・・・・・・・・・ 18

1. 付ける ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
2. 待つ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
3. 話す ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
4. 教える ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

V. 結論 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

付. 言語資料のパーソナル＝コンピュータ処理 36

研究組織

研究代表者	野元　菊雄	全体総括、	場面・行動・文法分析
研究分担者	高野美智子	全体総括補佐、	資料処理
	高田　　誠	文法分析総括、	場面・行動分析
	正保　　勇	文法分析、	文脈分析
	中道真木男	文法分析、	文脈分析
	石井　久雄	文法分析、	資料処理
	上野田鶴子	文脈分析総括	
	菱沼　　透	文脈分析、	文法分析
	志部　昭平	文脈分析、	場面・行動分析
	川瀬　生郎	場面・行動分析総括	
	田中　　望	場面・行動分析、	文脈分析
	日向　茂男	資料処理総括、	場面・行動分析
研究協力者	清田　　淵	資料処理	

研究補助者	伊豆山敦子	内田紀美子	大竹　啓司	金子比呂子
	上条　　厚	斉藤百合子	島村　公子	坪田　雅子
	古川ちかし			
	青柳由宇子	石川　公子	伊豆山真理	木村　静子
	佐々木真美	沢本恵美子	須藤　　晃	早川　亜紀
	三国　純子	森　　雅子	和久井陽子	

I.　課題　——　予備的分析

現代の標準的な日本語の話しことばにおいて、動詞に対し、その主要な格の関係に立つ語句は、その全部が同時に顕現することがあまりない、という、本報告の実証しようとする命題が、抑そも命題として真偽を問われる価値を有するのか。そのことを、本章で検討する。この命題は、抽象的な知識としては広まっていると言うことができるであろうが、また、話しことばのみならず書きことばについても、具体的ないし組織的には知られているところがほとんどないと言うこともできるであろう。具体的ないし組織的知識の欠如は、日本語構文論の構想の上のひとつの難点となっているように思われる。確認を怠らないというのみでも意義はあるであろう。

検討の結果は、課題を課題とすることに肯定的であると言ってよいものと思われる。検討は、資料から適当に抽出した一連の発話についての分析として行なう。この分析の後、本報告の実証しようとする命題は、その実証の方法を呈示されるであろう。

1.　一連の発話における全動詞について

資料から抽出した一連の発話につき、課題を課題とすることの妥当性を検討する。件んの発話は、格のよく顕現しているものであるように思われた、大学の講義のものである。この検討は、資料がどのような形をしているか、そこから動詞および格をどのように取り上げたか、ということを示すことをも、目的としている。資料の全体、その引用の表記形式については II.章2.節に述べる。

次ぎの談話は、東京都内の大学の学部における講義の冒頭約５分間である。開始の挨拶に続く講義内容は、服部四郎『音声学』（岩波全書 131）99ページをテキストとするｒ音の解説であり、ここに取り上げた部分の直後から 100ページのそり舌ｒ音の解説に移る。担当教員は男子、50歳台、教授。聴講者は 7名いたが、ここに取り上げた部分にその発言はない。大学教室において、 9月下旬金曜日午前。

依然と	し		て	(1)
エェうまく声が	出		ない	(2)
	治ら		ないんで	(3)
エ大変音声学の時間わ物凄く具合が			悪いんです〜。	
九十九pageで				
エ九十八pageのおおしまいの所で				
日本語のら行音の事にアノまで	来	ている	訳ですけれども	(4)
ら行音もまだエェ色色の問題が	有り		まして	(6)
九十九pageの五の五の三の所で				
これわエェ　動音震え音て			んで	(7)
エェあ普通ｒの音て	いう			(8)

風に　言っ　ている　んで　物で〜　(9)
ですからこれも我我に　とっ　て　(11)
そんなにそのエェ〜珍しい音でわ　ないので
エそのｒのオォ音がエェわ
エェ我我わ普通に日本語で　発音し　ている　様な　(12)
エェ舌がアァ歯茎の方にエェ　向かっ　て　(14)
エェ　弾く　様な　(15)
運動を　する　(16)
音と　いう　(17)
のわ
この九十九pageの下下一番下の方に　有り　ます。　(18)
で　らって　いう　様な　(19)
アァ　弾く　様な　(20)
運動が　有り　まして　(21)
これが
逆にがア外国の人ににわエェ非常にィィ　まねし　にくい　(22)
音の中に　遣いっ　てくる　様なんですね。　(23)
不思議なアノォに日本語独特のオォ音〜　〜　〜　し　(25)
しかしそのォオォ　弾く　様な　(27)
運動がエ比較的　繰り　(28)
数回速やかにィイ数回　繰り返され　て　(29)
ｒの音が　出る　(30)
と　いう　(31)
風に　説明され　て〜。　(32)
でもこう　やっ　て　(34)
エェ或る音をがどう　いう　(35)
風にイィな運動で　出　てエェくるか　(36)
って　いう　(38)
様な事をオ文章に　書く　と　(39)
こう　いう　(40)
非常にイ長長と　説明し　て　(41)
エイアレこれ　よ読み　ながら　(42)
これこれ　まねし　ながら　(43)
やっ　ていっ　たって　(44)
実際の音がどんな風に　出　てくる　か　(46)
判ら　ない様な　(48)
アァ説
聞か　ないで　(49)
我我ｒの音て　いう　(50)
のわ　よく　聞い　て　ますから　(51)
エ間違ないと　思い　ますけども　(53)
アノオ　聞か　ない　(54)
オ音に　つい　て　(55)
説明をいっくら丁寧に　書かれ　ても　(56)
なかなかそれがどう　いう　(57)
音だかって　いう　(58)
のわ　判り　にくい〜　(59)
と　思い　ます。　(60)
で　そのｒの音わエにほ日本語でも
オォ江戸っ子のべらんめえ言葉って
これわ　今ごろべらんめえ言葉って　(61)
のわ　あんまり
イィ時代錯誤みたいな風な感じが　し　ない訳でも　(62)
ないんですけども
オォ非常にィィそう　いう　(63)
巻き舌のオォではアノ話を　する　(64)
なんて　いう　(65)
の　今でもエェ dramaなんかで
アノちょっと時代が　遡っ　て　(66)

エェそして				
いなせなァァ職人衆なんかのせりふを	出す		時	(67)
	付ける		時にわ	(68)
そのオ巻き舌のｒを	使っ		て	(69)
	発音させる		んですね。	(70)
そんで　エその同じｒの音でも				
色色なエェ調音点の違いが	有る		んで	(71)
エェ一番こう奥の方の方にこう	巻き			(72)
舌を	持ち上げ		た	(73)
方が　ｒの音は	出し		いい訳ですけども	(74)
で前の方に調音点が	移る			(75)
に	したがっ		て	(76)
	発音し		にくい	(77)
って	いう		様な	(78)
事も	書い	てあり	ますけども	(79)
アノオ				
一番エェ前寄りでエェ舌先をオォエェ	震わせ		て	(81)
そして奇麗なエェ trillの音を	出す			(82)
のわ　エェainu語に	有る		んですね。	(83)
で　エェアノflatに近いエェｒ				
アノ舌の先でそしてアノ	ころ転がす		様な	(84)
ああｒの音が	聞かれる		んです。	(85)
で　東北大学で長い間音声学	やっ	て	た	(86)
鬼さんなんかそれをオォ実に見事に	再現し	てみせ	て	(88)
	亡くなっ		た	(90)
金田一京助先生をオその随喜の涙を	流さし		た	(91)
って～	有る		んですけども	(92)
とにかく特徴的な音～。				
で　エェ九十九pageの下の方で				
エェ spain語で				
エェソノｒがソノ正書法で一つで	書かれる			(93)
ウゥ場合と　二つｒを	重ね		て	(94)
	書かれ	ている		(95)
ウゥ単語とが	有り		ますけども	(97)
それが弾き音とそれからエェ震え音と	いう			(98)
ので	区別され	ている。		(99)
その直ぐ前の所でわ				
czeck語わエェ摩擦的な音をそれに	加え		て	(101)
摩擦的な震え音～。				

動詞は、録音上明瞭か不明瞭かを問わずに確認ないし推定し得るものとして、101個が算出される。次ぎは、以下において、左記の動詞とみなす。

言う　(7)(61)
いる　(52)(87)

次ぎは、検討の対象から除外するものとする。

録音不明瞭のもの
(25)(26)(33)

補助的用法のもの　　録音不明瞭　(26)(33)

いる　(5)(10)(13)(52)(87)(96)(100)
ある　(80)
くる　(24)(37)(47)
いく　(45)
みせる　(89)

後置詞形成的なもの

取る　(11)
就く　(55)
従う　(76)

次ぎのもの

言う　(7)(8)(17)(19)(31)(35)(38)(40)(50)(57)(58)(61)(63)(65)(78)(98)
する　(1)

これらを除外する理由は、 II.章およびIII.章で触れる。このほかの65個が当面の検討の対象である。

その65個は、格をやや広めにとって分類を施すならば、次ぎのごとくである。

___ガ　___ニ　___ヲ　2例　加える(101)　流さす(91)

___ガ　___ニ　8例　有る(18)(71)(83)(97)　移る(75)
遣いる(23)　まねしにくい(22)　向かう(14)

___ガ　___ヲ　6例　聞く(51)　再現する(88)　する(16)
出しいい(74 存疑)　発音する(12)　やる(86)

___ガ　19例　(ら行音も) 有る(6)　有る(21)(92)
書いてある(79)　書かれる(93)(95)　聞かれる(85)
区別される(99)　繰り返される(28)(29)　遡る(66)　する(62)
出る(2)(30)(36)(46)　亡くなる(90)　判る(48)(59)

___ニ　___ヲ　1例　持ち上げる(73)

___ニ　2例　来る(4)　巻く(72 存疑)

___ヲ　___ト　1例　言う(9)

___ヲ　12例　書かれる(56)　(文章に) 書く(39)
重ねる(94)　聞く(94)　する(64)　出す(67)(82)　使う(69)
付ける(68)　震わせる(81)　まねする(43)　読む(42)

___ト　3例　思う(53)(60)　説明される(32)

格無顕現　11例　聞く(49)　転がす(84)　説明する(41)
治る(3)　弾く(15)(20)(27)　発音させる(70)
発音しにくい(77)　(こう) やる(34)　やる(44)

どの動詞について主要な格すべてが顕現しているか、どの動詞についてそうでないか、という判定は、実を言うならば、必ずしも明確になし得るものでないようである。ここにおいても、格として認めるか否か問題のありそうなものは、　(文章に)　のように括弧内に注記した。次ぎの16例は、恐らく、主要な格すべてが顕現していると認めてよいであろう。

加える(101)　流さす(91)
有る(18)(71)(83)(97)　移る(75)　遣いる(23)　まねしにくい(22)　向かう(14)
再現する(88)　する(16)　発音する(12)　やる(86)

する(62)　亡くなる(90)

次ぎの 7例は、受動態における　＿＿ニ（ヨッテ）　を主要であると認めないならば、主要な格すべてが顕現している。

書いてある(79)　書かれる(93)(95)　聞かれる(85)　区別される(99)
繰り返される(28)(29)

次ぎの11例は、　＿＿ニ　を主要であると認めないならば、主要な格すべてが顕現している。

出しいい(74)
有る(6)(21)(92)　遡る(66)　出る(2)(30)(36)(46)　判る(48)(59)

次ぎの 1例は、引用の　＿＿ト　を主要であると認めないならば、主要な格すべてが顕現している。

聞く(51)

残る30例が、主要な格すべての顕現を充足してはいないと認められるものである。この認定の結果は、換言するならば、　＿＿ガ　の顕現によって主要な格すべての顕現を知ることができるということでもある。それはともかく、この65例中35例にすべての格が顕現したという数字は、半数を上回るものであり、実証しようとする命題の「すべての格が顕現することがあまりない」という趣旨にとっては芳しいものではないようである。しかしながら、ここに検討した一連の発話は、格の顕現が多いと思われたものである。そのことを考慮するならば、65例中35例という数字は決して大きいものではないであろう。

2.　課題の構成

本報告の課題は、既に述べたように、次ぎの命題を実証することである。

現代の標準的な日本語の話しことばにおいて、動詞に対し、その主要な格の関係に立つ語句は、その全部が同時に顕現することがあまりない。

その実証の方法を呈示する。

上記の命題を単に実証しようという、その限りにおいては、1.節に行なったように、動詞の出現——についてその格の顕現の実態を調べていけばそれで済むことである。1.節とは異なって、芳しい結果の出ることを期待してもよいであろう。しかしながら、それで例えば動詞という一類に対する格の顕現の総体的比率を算出してみたところで、この命題の当否を単純に解答したという以上の有意義な作業をしたとは言い難いと思われる。そのうえ、格の認定は、その1.節において既に知られたように、必ずしも簡明なものではない。その場その場で考えていくことも固よりあり得るわけであるが、作業の効率、結果の応用

範囲などを考慮に入れるときには、必ずしも望ましいものであると思われない。こうしたことは、立ち入った議論を1.節に避けた理由でもある。

更に、われわれは、実証すべき命題について、それが真であることを抽象的に信じているのみならず、動詞個個において格の顕現のし方が異なるであろうことをも、観念的に理解している。例えば、典型的な自動詞は、主格の有無のみが問題である。典型的な他動詞は、主格の有無と対格の有無とが問題であり、ただし、同じく他動詞ではあっても甲と乙とが同様に格を顕現させるか、予断は許されない。また、自動詞の主格の有無と他動詞の主格の有無とを、同一の水準で論ずることができるか否かは、不明である。能動態と受動態とがあれば、同じい動詞であっても格の観察の方法を変更しなければならないはずである。こうした理解は、当初の命題を構成し直させるものである。すなわち、本報告の課題は、次ぎの命題を実証することに切り替えることとする。

現代の標準的な日本語の話しことばにおいて、動詞に対し、その主要な格の関係に立つ語句は、その同時に顕現するし方が、動詞個個において決定している。ただし、動詞個個とは、出現した——ではなく、それを或る程度まで抽象したものである。

この命題の実証の結果すなわち動詞個個において決定している格の顕現のし方が、一般に格すべての同時的顕現を排除するものであるならば、当初の命題が肯定的に実証されたことになることは、明白である。

構成し直された命題を実証する方法は、もはや明きらかである。資料から同一の動詞を抽出し、その用例を分析することである。或る動詞がどのような格と関係し得るかは、その動詞の用例を一覧して決定すればよく、例外的に顕現した格は、特に記述を行なえばよい。その動詞が関係し得る格を決定するということは、この方法にとっては、すなわち記述の効率化のための手段である。この手段に訴えた分析を、 IV.章で行なう。

用語について規定しておく。ただし、 II.章以下の資料の検討、用例の分析の進行に従って、逐次、概念の改訂があり得るものとする。現代の標準的な日本語の話しことばは、東京およびその近郊に在住する、大学（院）教員・大学（院）学生・研究所研究員・研究所研修生、およびそれに関係する人びとの、公的および私的な場における、口頭の自然な発話である。動詞は、一個の独立動詞またはそれと後接補助動詞・助動詞・助詞等との全体である。主要な格は、取り敢えず、主格・対格・与格と言われるものであり、この格の関係に立つ語句は、引用の場合いを除いて、その格の関係に立つ名詞句である。格の関係に立つ語句は、連用修飾のように顕現するか、動詞の被連体修飾として顕現するか、それ

は問わないこととする。ただし、当の語句を単に格と称することともし、本報告の標題およびこれまでの記述にその用法を行なってきている。顕現するとは、発話において音声を与えられるということである。

II. 資料 —— 立証の領域

本報告の実証しようとする命題に言う、現代の標準的な日本語の話しことばとは、実を言うならば、本研究組織が資料に対して付した符丁にほかならない。その資料は、どのような目的のもとにどのように収集したものであるか。そのことを本章で述べ、以って件んの符丁の誇張でないことの主張に代える。また、資料は、当然に、命題の立証に限界を画定する。それについても、ここで検討しておくこととする。

1. 資料

本研究に用いた資料は、文部省昭和52－54年度科学研究費補助金による特定研究「日本語教育のための言語能力の測定」（研究代表者野元菊雄）において収集した、話しことばの録音資料である。ただし、分析上に実際に用いたものはそれをカタカナに文字化したものであり、本報告に引用したものは引用に際して更に表記上の処理を施したものである。このことについて述べる。

資料収集の目的および方法については、上記特定研究の報告書『日本人の知識階層における話しことばの実態』（国立国語研究所、1980年 3月）に詳しい。非日本語人が日本語を効果的に習得するには、習得すべき日本語の言語能力についての基準が明確にされている必要があるが、話しことばについては、研究も不充分であって基準が明確でない。そのため、取り敢えず大学留学生に対する日本語教育を念頭に措いて、話しことばの実態を把握しようとする。大学留学生が日常接して日本語を使用していると考えられる人びとは、大学教員および学生であり、その話しことばの実態を知ることが当面の目標となる。以上が、当該特定研究の資料収集の目的である。

資料の収集は、「２４時間型」調査として行なった。すなわち、東京在住日本人15名、大阪在住日本人 9名、また東京在住外国人留学生 1名を調査者として、1977年および翌年 9月下旬ころの平日に、 1名 6日、 1日 1時間の行動の記録および言語の録音を行なうよう依頼した。大阪の調査は東京の調査研究の参考とするため、また外国人留学生の調査はひとつのケイス＝スタディとして、それぞれ行なったものである。行動の記録および言語の録音の時間は、午前 8時～午後 8時の間として、例えば調査者A、B、Cについては次

ぎのようになっている。

9月26日（月）	A 8:00－ 9:00	B 9:00－10:00	C 10:00－11:00
27日（火）	10:00－11:00	11:00－12:00	12:00－13:00
28日（水）	12:00－13:00	13:00－14:00	14:00－15:00
29日（木）	14:00－15:00	15:00－16:00	16:00－17:00
30日（金）	16:00－17:00	17:00－18:00	18:00－19:00
10月 1日（土）	18:00－19:00	19:00－20:00	8:00－ 9:00

調査者は、調査時間には、なるべく不断のような平均的な行動をとることとし、時、所、場面（講義、クラブ活動、家庭での雑談、読書、睡眠、などなど）、同席した人びと（その場面におけるその人びととの物理的距離関係、親疎関係などをも含む）、話題などについて記録し、かつ、調査者が話し手であると聞き手であるとのいかんを問わず、言語の録音をする。もし指定時間帯の行動が平均的なものでなければ、調査を翌週同曜日に繰り延べる。以上が、資料収集の方法である。

こうして収集された資料は、研究の便のため、カタカナによる文字化資料として整備された。この文字化は、先ず調査者自身によって、場面、話し手などについての注釈記入とともに行なわれ、それを当該特定研究分担者がチェックして、研究遂行上の言わば底本が完成した。本研究において用いたのは、その文字化資料のうち、東京の調査者15名中 7名のものの42時間である。収集した資料の全部を用いるに至らなかったのは、その整備等の効率を考えたためである。この42時間の資料は、調査者自身のことばとともに、調査者が聞き手に回ったことばをも含む。その性質などについては2.節で述べる。なお、以上の資料は、調査者等の謂わゆるプライバシに関わるところが大きく、調査者との協定により、現在のところ、上記特定研究報告書および本報告書に引用した例そのもの以上には公開していない。

本報告への資料の引用は、文脈ができる限り明きらかになるように行なうこととした。その際、次ぎのような表記形式による処理を行なっている。

漢字・ひらがな	下記を除くすべての部分。
カ タ カ ナ	論理的意味を担ってはいないであろう部分。
ｒｏｍａｎ	外来語および外国語の部分。
～	録音不明瞭の部分。
、 。 ？	切れ目らしいところ。適宜施した。 ？ は疑問の抑揚。
「 」 『 』	引用部分。適宜施した。
（漢字・カタカナ）	文脈に関する注記。

この表記形式は、発話の音声の忠実な文字化を意図してはいない。漢字・ひらがなとカタカナ・ｒｏｍａｎとの遣い分けは、厳密でない。漢字とひらがなとの遣い分けは、スペイスによって適当に行なっているため、全体における統一がない。送り仮名も同様である。

仮名遣いは現代仮名遣いによるが、助詞「は」「へ」については「わ」「え」の表記を採り、ただし注記においては「ハ」「へ」とした。I.章1.節の引用も、この表記形式によって行なった。

2. 課題立証の領域

本研究に用いた資料の発話は、すべて1977－78年に東京都内ないしその近郊で行なわれたものである。その意味においては、現代の標準的な日本語の話しことばという符丁をこれに与えることも、既に不当でない。しかしながら、発話者あるいは場面などについて検討を行ない、その符丁にしかるべき限定を加えておくべきであろう。

1）発話者および場面

本研究に用いた資料の中の発話者は、殆んどが、東京ないしその近郊に在住する日本人であり、その成長もその地域であるようである。もっとも、発話者ひとりひとりについてこの事実を確認しているわけではなく、調査者およびその家族を除いては、大方推測によるものである。ただし、その言語が特に東京語でないとする特徴は、認められない。しかしながら、用例を検討する上で問題となる明きらかな例外もある。第一に、東京近辺に在住するが、その言語からして西日本出身であると考えられる大学教員が、 1名いて、東京近辺の或る大学で講義を行なっている。第二に、日本語を第一言語としない、大学留学生が、多数いて、日本語の授業を受けてそこで発言をしたり、教員との会話を行なったりしている。以上の例外は、標準的な日本語という範囲からは食み出るものであるが、標準的な日本語の使用者に一般に理解はされる範囲にあるという意味において、検討の対象にひとまず加えておいた。固より、日本語の授業の際の誤用などは、その対象から外した。なお、資料中には、外国語も少なくないが、検討の対象とならないことは当然である。

発話者は、職業は大学教員・大学（院）生・研究所研究員・研究所研修生が多く、年齢は20歳台から50歳台が多く、性別は男女の多寡の差があまりないようである。これは、特定研究時の調査目的・方法からして当然であろう。一般公務員・会社員・自営業者、高等学校以下の生徒・児童、老齢者などの発話の少ないことは、注意しておかなければならない。また、大学・研究所も、大学は文学・教育・外国語・教養学部であり、研究所は国立国語研究所であり、更に言うならば言語関係であって、文科系統の一部に集中する。理科系統は、発話内容としてもないに等しい。こうした欠落は、本研究においても、諸般の理由により、補うことができなかった。

資料収集の目的から明きらかなように、場面は、多かれ少なかれ大学教育に関わるとは

言い得るであろう。上記特定研究報告書によるならば、その場所という観点からは大きく公的生活（大学・研究所など）、私的生活（自宅）、外出先（各種学校、公共施設、店、路上、乗り物など）の３類に分けられ、本研究に用いた42時間の資料は、そのような場面の数としては、

公的生活	183	私的生活	42	外出先	53

であって、２対１で大学・研究所の内と外とになる。時間量あるいは発話量に関する集計は行なっていないが、単位時間当たり発話量は、公的生活場面において大きく、他において小さいのではないかと思われる。場面数が時間量に比例するか否かは判らないが、もし比例するならば、資料とした発話の大部分は公的生活場面に属することになる。このような事情からするならば、われわれの言う現代の標準的な日本語の話しことばとは、相当に公的色彩の強いものである。もっとも、「標準的な」というところに、公的であるというイメイジを描くひとはあるかも知れない。なお、話題という観点からは、

講義・受講	13	放送番組み視聴	9	事務・用事	144
日常・趣味	75	世間・噂	9	その他	28

であり、事務・用事は８割以上が公的であるようであるが、一応多岐に亘っている。

以上のような偏りがあるにもかかわらず、本研究においては、その資料を用いた。話しことばは、特に自然会話のそれは、言語分析の資料として整えられているものが少ない。用いた資料は、そうした少ないものの中にあって、われわれの保管するものでもあり、われわれの知る限り、或る程度の量を備えた最も新しいものである。それが、理由としては消極的ながら、本研究のための資料選定の理由である。資料収集から本研究を始めることも考えられないわけではないが、適当な資料が手許にあるのであるから、資料収集・整備に費やす時間を資料分析に費やそうとしたのである。

２）録音精度

自然会話の収集の困難である理由は、その内容のプライバシの問題もさることながら、録音が困難であることにもある。上記資料も、本研究で用いたと否とを問わず、総体的に録音良好であるとは言い難い。録音機器を調査者側に置いたため、その話し相手の録音の音量が小さく、また、自然な環境で録音を行なったため、雑音が多い。この難点を本研究において補完することは固より無理であり、却って相当数の用例を検討の対象から排除しなければならなかった。

用例の分析に当たって、録音という資料収集の方法の限界を感じさせられたのは、助詞

の有無の認定、および文の切れ目の形式の認定である。助詞の有無の認定とは、例えば格助詞　を　は、直前の語の末尾がオ段音である場合い、そのオ段音の長音との弁別が困難である上、長音として融合しているときにはその長音の弱化が絡み、有無を認定することが困難になるのである。文の切れ目の形式の認定とは、文の中止なり終止なりに相当する部分が、全体的に弱化し、実際に文の中止なり終止なりであるのか、あるいはどのような補助語・助動詞・助詞を具えているのか、例えば　＝ている　であるのか　＝てある　であるのか、認定することが困難になるのである。本研究においては、このような点は、或る程度までのところで検討を断念せざるを得なかった。すなわち、 IV.章の記述は、格助詞　を　などの有無についても議論するところがあるが、その有効性は低めに理解せらるべきである。また、録音不明瞭の部分に文の切れ目を記録するところがあるが、その部分は弾力的に理解せらるべきである。

III.　記述に関わる諸問題

本報告が命題を実証しようとする、その実証すなわち IV.章の記述について、問題となるあるいはなったことがらを、ここに予め述べておくこととする。なるべくI.章および IV.章の用例を念頭に措いて述べることとはするが、それは本研究の成果を集約的に提示するものではあっても細部を含む全体に及んでいるわけではないので、それに必ずしも関係しないことがらも併せて述べておくこととする。

1.　動詞の実質性と形式性

実質的な意味を担った動詞と、形式的な意味をしか担っていない例えば補助動詞とは、格のあらせ方が異なったものになるであろうことは、容易に想像し得るところである。ここには、その実質性と形式性との関係について述べる。併せて、格と動詞との謂わゆる連語(collocation)についても触れる。

実質的な意味を担った動詞が、様ざまな格と関係し得ることは殆んど明瞭である。そうした格特にいま主要な格と呼んでいるものが、顕在するにせよ潜在するにせよ、存在しないならば、その動詞自体の意味が完結しないからである。それに対して、形式的な意味をしか担っていないものは、格と全く関係しない、または特定の恐らくガ格でない唯だひとつの格としか関係しない。不要の格が存在し得るならば、その形式性が破壊されていることになるからである。形式的な意味をしか担っていないものとして、例えば次ぎのようなものが挙げられる。格と関係するならばその格の格助詞とともに、格でなくとも特定の関

係を結ぶものがあるならばそれとともに、掲げる。

補助動詞　＝出す　＝始める　＝終わる　＝得る
＝てある　＝ている　＝ておく　＝てしまう
＝ていく　＝てくる　＝てみる
＝てあげる　＝てやる　＝てもらう　＝ていただく　＝てくれる
＝である

後置詞的なもの　＝にしたがい　＝につれ　＝にかかわらず
＝につき　＝にとり　＝により
＝をもって　＝をはじめ

形式的なものを実質的なものとともに扱うことに、全く意味を認め難いというわけではない。例えば、資料中の用例数に関する次ぎのような集計は、それなりに問題を提起するものであると考えられる。

ある	動詞用法	907	うち	実質用法	737	＝てある	79	＝である　91
いる		477			146	＝ている	331	(除　＝てる　531)
行く		397			309	＝ていく	88	(除　＝てく　24)
来る		459			158	＝てくる	301	

動詞用法というのは、　あり方、　おありになる　というような名詞的用法を除いたものである。　＝てくる　には日本語の授業におけるその使用の反復63回をそのまま数えてある。しかしながら、動詞と格との関係を検討する際に、実質的なものと形式的なものとを分別せずに扱うならば、結果が歪められることは明きらかである。本報告の課題に即して言うならば、命題の実証は、形式的なものを取り込むことによって、甚だしく有利な方に傾く。しかも、有利に議論されたその結果は意味をもたない。

さて、実質性と形式性とについて問題となるのは、その分別である。形式的な動詞が猶お動詞であり得るのは、そこにも、実質的な動詞の形態上の特徴が、一部なりにせよ、認められるからである。後置詞的なものにも、例えば、　＝にしたがい　には、　＝にしたがって、　＝にしたがいまして　のごとき形態交替がある。その形態交替がしかし実質的な動詞に比して不完全であり、構文上にも制約があり、意味上実質を欠いているために、形式的な動詞である。それでは、形態交替の不完全、構文上の制約、実質的意味の欠如というものを、どのように確認することができるか。例えば、　＝という　は、　＝というふうに、　＝というように　という形態であって、それを受ける動詞が　言う、　思う　のようなものである場合いには、　いうふうに、　いうように　を除いても実質的な意味を損なわないから、形式的であると評価して恐らく誤りがないであろう。　＝というふうな発言、　＝というような思考　のような場合いであっても、それに準じて形式的であると評価してよいかも知れない。しかしながら、われわれは、いまのところ、　日本という

国　のような場合いについては、実質的であるのか形式的であるのかを判定する有効な基準を見出だしていない。人びとという主格の想定し得る、呼ぶという意味を担った、実質的な動詞であるようにも思われる。

動詞の実質性と形式性との問題は、接続詞、副詞にも関係している。接続詞　したがって　は、上の後置詞的な　＝にしたがい　との関係が深い。この象徴的な一点を記して、この問題には最早立ち入らないこととする。なお、副詞に問題が及ぶと、動詞の副詞的用法という問題が展開する。形容詞のもつ連用修飾機能を動詞はもたない、という理解が一般にあるが、われわれは、動詞の　＝て　の形式にその機能があるのではないかと考えている。I.章1.節の　二つｒを重ねて書かれている単語とが　の(94)　重ねて　は、それであると考えている。そこには対格が顕現しているが、主格を想定することが困難であり、もし主格が存在し得ないようなものであるならば、動詞と格との関係の検討には考慮が必要である。

動詞の実質性と形式性との問題の最後に、連語(collocation) に触れておく。この事象は、動詞と格との関係から言うならば、或る結合が固定的であるという点において上記のものと共通し、その他の結合が自由であるという点において上記のものと相違する。問題は、やはり、或る結合が固定的であるという点にあり、その結合は、全体として意味を獲得し、動詞それ自体の実質的な意味というものが希薄になっている。例えば、　気を付ける　について、　付ける　の実質的な意味から　気を付ける　全体の意味を説明ないし理解しようとすることは、あまり生産的でない。しかも、この　付ける　は、形態的には、また構文的には、純然たる動詞であると見られる。恐らく、　気を付ける　を一個の動詞と同等視することが、最善の策であろう。しかしながら、実質性と形式性との分別の困難であることが、ここに延長される。動詞と格との自由な結合と連語との分別は、更に困難である。この問題については、われわれは、連語に関する別個の研究を要すると判断し、件んの分別を行なわず、動詞をすべて実質的なものとして扱った。この処理が命題の実証に有利に働いたか不利に働いたか、その解答は IV.章の記述に譲っていまは言わない。

2.　格の認定

格の顕現ということを言うことは、顕現しているものがどのような格であるか、あるいは格でないか、という認定を、当然の前提とする。格のいかにも格らしい顕現は、格助詞を伴なったものである。これについても、例えば　＿＿から　となっているものを、主格・与格・対格などに相当し得るものとして、それらの格と評価しながら構文を処理してよい

か否か、問題がある。そうした顕現でないものは、先ず格の顕現であるか否かが問題となる。次ぎに、かりに格の顕現であるとしても、主格・与格・対格などのいずれかふたつ以上に評価し得る場合いが少なくなく、その決定が問題となる。また、場合いによって、呼格すなわち呼び掛けまたは読み上げとも評価し得ることがある。更に、引用の ＿＿と を格少なくも主要な格として評価と得るか、意味上格と同様であるような或る種の形態をどのように評価するか、というような問題がある。例えば、 若年と見える、 若いと見える、 若く見える は、どのように分別されるであろうか。

この原理的な問題について、われわれは実は有効な処理規準を未だ見出だしていない。事例を個別的に処理していかざるを得なかった。われわれは、却って、構文、文意、動詞それ自体の意味にとって、副詞などの連用修飾部が格とともに重要な地位を占める、ということを確認した。本報告においては、格と評価し得るものは、当初の命題に不利となるように、なるべく格と評価し、また、いくつかの格として評価し得るものは、第一印象によって処理した。当初の命題に不利であるか否かということは、I.章2.節に構成した命題にとっては必ずしも意味をもたないが、記述上は、格である可能性のあるものとして、無視しない方がよいのである。

格の名詞が動詞の被連体修飾語となっているものも、本報告においては、格として顕現しているものとして処理した。これも、新たに構成した命題にどのような意味をもつかということは、記述にまつものであるが、被連体修飾語となった格の用例は少ない。

3. 動詞の態

動詞の構文と形態との関係は、種種の問題を抱えていると言ってよい。その全般を覆う余裕は、本研究にはなかった。動詞の構文にとって最も問題となるはずである態(voice) について、ここでは述べておく。

態の典型は、日本語においても能動態と受動態とであろう。ただし、日本語の受動態には、構文上および形態上の密接な関連に基づいて、可能態を含めておいてよいかも知れない。いまここでは謂わゆる能動態と受動態とをさすこととし、態の問題として扱うものもそれに限ることとする。われわれが先ず知ったことは、受動態 ＝（ら）れる の出現が甚だしく少ないということであった。すなわち、受動態の出現が資料中に或る程度の量まであったならば、構文上にどのような格が顕現し、どのような言語的ないし非言語的脈絡において出現するか、という課題に取り組むことができるはずであった。しかしながら、IV.章の記述に参考までに記したように、検討の対象とするにはあまりに乏しい量でしか

出現しなかった。それに対してわれわれが僅かに想像したことは、次ぎの２点である。第一、非情の受け身は出現しないという古代日本語の原則は、現代においても有効であるのではないか。更に言うならば、迷惑を受けたときに使用するものが、基本ではないか。第二、能動態における対格ないし与格に注目したときに受動態が使用されると言われるが、そういうことは言い得ないのではないか。この２点については、固より、いま議論を展開することはできない。

形態上は能動的でありながら意味上は受動的である形態、　＝てある　の結合した形態についても、出現することの少ないことは、1.節に示した　ある　の補助動詞用法の用例数に知られるとおりである。ここに問題となることは、寧ろ、主格ないし対格が格助詞を伴なわないときに、その格が不分明になることである。例えば、意味上能動的な　字を書いてある　と受動的な　字が書いてある　とは、　字、書いてある　あるいは　字は書いてある　などにおいて対立が中和する。格の格助詞の少なからず見えないことは、話しことばの特徴のひとつである。もっとも、　＝てある　の問題に関する限りでは、その意味上の能動性を否認するという見解があるかも知れない。しかし、そう簡単でもないようである。ただし、不分明のものを第一印象に従ってどちらかに分類せよとなれば、大方のものを受動性の方に分類してしまうであろうことは、否定しない。

＝てない　と結合した形態には、更に問題がある。　＝てない　の形態は、発生的ないし音韻的には　＝ていない　の縮約であると理解され、それはそれでよいのであるが、意味上はその範囲を超えてしまっている。すなわち、　＝てない　は、その発生の事情によって当然に　＝ている　の否定であるとともに、恐らく、それ自体を　いる　に関係させずに唯だ　＝て　および　ない　二者のみに解体し、それに動詞　ある　と形容詞　ない　との肯否の関係を被せて、　＝てある　の否定ともなっている。　＝てある　と結合した形態に能動性を認めると否とにかかわらず、その受動性を否認することはできないから、＝てない　は、少なくも　＝ている　の否定として能動的であり、それとともに　＝てある　の否定として受動的である。主格ないし対格が格助詞を伴なわないときには、その格を決定することは、　＝てある　に際してよりも困難である。

いま、　＝てない　の形態が　＝てある　の否定であり得る理由を推測したばかりであるが、その推測を覆し得る事象も存在する。すなわち、能動態と受動態との対立が中和し得ている形態が、肯定においても、　＝てある　の問題を別として、存在し、　＝てます　の結合した形態がそれである。これも発生的ないし起源的には　＝ています　の縮約であ

ると理解されるが、意味上はともかく　＝てあります　にも相当し得ている。

最後に、自動詞と他動詞との関係に一言触れるべきである。自動詞のうちには、意味上は他動詞の受動的なものと言い得るものがある。　つかまる　は、構文上も、つかまえる主体を格助詞　に　の格で表わす。他動詞ではあるが、　教わる　も同断である。能動態と受動態の問題にはこういったことも併せて考えていかなければならない。可能態も当然に絡んでくるであろう。　掛かる　は、　絵が掛かっている　という場合いは、　絵が掛けてある　とともに受動的な意味を帯びているが、　絵が掛かった　という場合いは、絵を掛けた　に対して可能の意味を帯び得る。しかしながら、こうした動詞も、また、用例数は少なかった。

以上、態の問題を要するに、われわれにとっては全く今後の課題であるということである。

4.　構文と脈絡

本研究は、構文に文脈・随伴行動・場面が大きく効果するという予測から出発している。しかしながら、当初計画していたほどには、文脈・随伴行動・場面が構文に課している制約について、充分に立ち入った検討を行なうことができなかった。理由は簡単である。文法自体としての制約と考えられることがらが、当初の予想を遥かに上回って存在しているらしく思われ、その制約の方を検討することが先決であると判断したからである。文法自体の制約として大きいものと考えられたのが、すなわち本報告の扱っている命題である。ここでは、動詞構文について、表現意図をも含めて文脈・随伴行動・場面との関係という観点から、得られた知見を簡略に述べる。

動詞に対する格は、表現意図ないし文脈が、単に応答をするものであるような場合いには、顕現が阻害されるようである。例えば、　本を持ってきたか——持ってきた——持ってきてない　における　持ってきた、　持ってきてない　など。この応答は、疑問に対するもののみでなく、依頼に対するものでもよい。　本を持ってきて——持ってくる——持ってきた　における　持ってくる、　持ってきた　など。依頼に対するものは、了承を示すものであるらしい。また、表現意図ないし文脈が、感嘆をするものであるような場合いにも、格の顕現は阻害されるようである。　持てた持てた　など。応答なり感嘆なりは、表現内容としては、情報伝達のその情報の希薄であるものである。そうした内容は、　うん、　いや、　おっ　のような謂わゆる感嘆詞のみを以ってしても、充分に表現することができる。なお、いま情報ということを言い出したが、顕現している格がすなわち情報の

不可欠の部分を担っている、というようなことを言っているつもりはない。

随伴行動ないし文脈が、現物を指示するものであるような場合いには、指示詞ないし特定の物を限定的に指示する名詞などの構成する格は、影響を受けるようである。しかし、顕現しない方向に影響されるのか、顕現する方向に影響されるのか、判然としない。随伴行動は、 II.章1.節に述べた資料によっては、全くに近く知ることができない。本報告の範囲に直接に関係するところがないため述べなかったが、本研究においては、随伴行動など視覚的なものの効果を知ることを目的として、録画をしながら実験を試みている。その実験で明確な結論が出なかったわけである。ただ、どちらかと言えば、現物を指示するという行動によって、 こう、 そう といった副詞を含む指示詞の顕現が誘発されるのではないかという印象をもった。こうした点については、猶お検討を要する。ちなみに、この実験において、話し手および聞き手の視線が、表現および理解を円滑に行なう上に重要な役割りを果たしているらしいことに、気付いた。その記録は録画では無理があり、適切な手段の開発の望まれるところである。もっとも、視線と構文とに関連があるか否かは考えていない。

構文と場面との関係は、第一には、話し手と聞き手とが相互に頻繁に交替するか否かという問題でもある。日常の雑談に見られるような、常に話したり聞いたりという状態のもとでは、格の顕現は相手のことばの中にあることも少なくない。ただし、そう解釈するのはそういう解釈のし方であって、相手のことばの中のものはまたそれなりに名詞文として完結している。それと対極的である状態は、原稿を読んでいるに近い講演などのものである。構文は複雑化し、格の顕現も問うだけの質と量とをもっている。中間的な状態は、原稿の用意のない講義のようなもので、I.章1.節の資料が具体例である。格の顕現は、量としては一応もっているが、その質すなわち動詞と格との対応としては、実は、怪しい面をももっている。ただし、雑談か否かまた原稿があるか否かといったことにかかわらず、言わば規律正しく話すひともあるから、いま問題にしているようなことは、場面と言うよりは、文体あるいは発話者の個性の問題に属するかも知れない。

IV.　動詞に対する格の顕現

動詞に対し、その主要な格の関係に立つ語句は、その同時に顕現するし方が、動詞個個において決定している、という命題を実証するために、動詞を個別的に記述する。ここに採った手段は、しかしながら、大方の強い非難を受けるかも知れないものであり、すなわち使用頻度の多くない僅か4語をしか記述しない。多数の動詞についてそれぞれの格の顕現を専ら数量的に記述していくことも、固より考えないわけではなかったが、本研究の趣旨が文法記述自体ではなくその問題を把握することにあることに鑑み、可能な限り具体的な使用例に即して、それも全使用例を掲げて、問題を考えることとしたのである。数量的に総覧することは、以下の記述に対する批判を得て後、現在の整理に必要な修正を加えてからのこととしたい。

採り上げた4動詞は、次ぎのとおりである。記述の対象とした用例数も示し、また II. 章1.節の特定研究報告書によって動詞内順位を示す。同報告書と本章の記述とでは動詞の認定規準が異なるが、いま同報告書によるならば、使用頻度20以上の動詞は80個である。左の数字は扱った本章の節である。

		本章使用例数	特定研究順位
1.	付ける	41	39
2.	待つ	35	42
3.	話す	17	72
4.	教える	39	46

ここに動詞と言うものは、動詞的に用いられた、能動的なもののみである。言い換えるならば、名詞的に用いられた　付け方、　お付けになる　など、使役的ないし受動的、可能的に用いられた　付けさせる、　付けられる　などは、扱っていない。そうしたものの構文が充分に動詞的であることに異義があるわけではなく、参考までに使役、受動、可能などを挙げることはしたが、それぞれここの記述を基礎にまた別の機会に記述を試みたいということである。そのような動詞について、顕現し得る格として想定したものを、各項の見出しとした。実際に顕現したものを格として評価するか否かということには問題が少なくないが、動詞に修飾された場合いを含めて、できる限り格としての評価を与えた。ただし、問題のあるものについては、能う限り文脈を示しつつ、努めてその旨を指摘した。

資料から使用例を引用するに際しては、それぞれの使用例について、動詞ごとの一連引

用番号を付した。番号の付されていない括弧は、そこで扱っている動詞でない参考例であることを示す。また、例の最後に次ぎのように脈絡に関する情報を加えた。

（発話者の性別・年齢、その職業、話題の種類、場所、　相手　）
その例　（　男50歳台、　大学教員、大学講義、　教室、大学生多数）

東京語または日本語を第一言語としない発話者については、出身地を、性別・年齢のあとに記した。職業は、その場面における言わば役割りを示すこともあり、例えば、大学生が塾で教師をしていて場所が塾であれば、塾教師とすることもある。相手は、発話者からの関係をも示し、例えば、大学の教員が同じ学科の教員に話している場合いは同僚とした。なお、こうした情報のうち、他の情報から明きらかであるものは、適宜省略に随った。

1.　　＿＿ガ　＿＿ニ　＿＿ヲ　　つける　付

この動詞は、資料中頻度20以上の動詞80個のうち、使用順位が粗ぼ中央の39位であり、他の動詞を検討する際の指針を与えるであろうと考えられて、最初のモデル的記述の対象となった。そのような本研究の過程のひとつの記念として、また記述結果も興味深いものであったので、ここにその記述を残す。ただし、当初併せて行なわれた形態論的記述は省略に随う。

用例数41。概要は次ぎのとおり。

＿＿ガ	＿＿ニ	＿＿ヲ	用例数	2
	＿＿ニ	＿＿ヲ		6
	＿＿ニ			2
		＿＿ヲ		27
格無顕現				4

この概要から直ちに知られることは、格の顕現のし方が　＿＿ガ、　＿＿ニ、　＿＿ヲ　で著しく異なっていて、この順に多く顕現し、特に　＿＿ガ　は他の格を伴なわずには顕現していない、ということである。後に記述する一部のようなものを除き、動詞全般について、格の顕現に関するこうした印象は、本研究の最終段階に至っても覆らない。

＿＿ガ　＿＿ニ　＿＿ヲ　は次ぎである。

で、これ（ココマデノ講義デソノ方法ヲ紹介シタ調査）わ、
われわれが slide調査というふうに名前をこう付けております。（1）
（男50歳台、研究所研究員、研究所研修講義、教室、研修生約20名）

これ（アイシャドウノ色）ね、sample～で卯月さんがけちを付けた　（2）
色よ。　（女20歳台、大学生、雑談、大学食堂、同学部生女20歳台）

(1)について、 ___ニ と評価したものは これわ であるが、この評価には問題があるかも知れない。(2)においては、 ___ニ が 付ける に修飾されて顕現している。

___ニ ___ヲ は次ぎである。

非常にエェ微妙な音ですけれども、 a(群ノ語ノ音)の場合いにわ、
舌先を上の歯の直ぐエェ後ろの歯茎のところに押し当てるようにしまして
鼻から息を出してそこで舌をしっかり上に付ける (3)
っていうことが大切になります。
(男、ラジオ英語講座講師、ラジオ英語講座)

きょうの発音の point、
〜(英語)の音を含む単語とそれから〜(英語)の最後の〜(英語)
あるいわ〜(英語)、〜(英語)、こういったところに気を付けて (4)
もう一度練習なさって下さい。 (同上)

だから零点六八の割り合いっていうのとおんなじ。
(相手:〜割るんでしょう。) じゃあここえ litre(トイウ単位)付ける (5)
わけにいかないでしょう。
零点六八 litre じゃないんだから。一に対してこれだけの割り合いなんだから。
(女40歳台、大学教員、子供ノ宿題ノ指導、家庭、長男小学生)

「このごろまあ元気になりました」。「まあこのごろ元気になりました」。
どっちでしょう。「まあ」、「元気になりました」の前に付けても (6)
いいし、「このごろ」の前に付けても (7)
いいです。 (女30歳台、大学教員、日本語ノ授業、留学生会館、留学生 5名)

「都市の土(ト)」までわまあ(アクセントガ)大体できてますから、
(ソレハ良イトシテ、) あと「地(チ)」を付けると (8)
おかしくなります。〜。「都市の土地」。 (同上)

(3)(4)は一連の発話中のものである。(5)は、 ___ニ が ___え として顕現していると評価した。(6)(7)は、 ___ヲ が主題化されて 「まあ」 として顕現していると評価した。(8)は、 あと を ___ニ と評価したが、追加の意味の副詞と評価すべきかも知れない。

___ニ は次ぎである。

「ICU と関係なさそうな」。「そう」、この「そうな」の使い方判りますね。
アノォエェ形容詞に付ける (9)
ときわ、「赤そうな」とか「大きそうな」とかアァ言うんですけど、
「ない」と言う場合いね、「ない」のときわ「さ」が這いって「なさそう」。
(女40歳台、大学教員、日本語ノ授業、大学教室、大学留学生多数)

はいそれでわ、 a(群ノ語) b(群ノ語)の順序で(模範ノ)あとに付けて、(10)
(発音練習ヲ)どうぞ。 (同(3))

(9)については、前文としたものが独立していないで、 この「そうな」の使い方判りますね は挿入部分であり、 「そう」 は主題化された ___ヲ である、という評価のし方もあり得るであろう。

___ヲ は、用例数が多いので、その例を列挙することは省略する。 ___ヲ として

顕現したものは、次ぎのごとくである。格助詞「を」の顕現のし方にも注目しておく。

気を	用例数	2		他に(4)参照
差を		1	(18)参照	
けちを		0		他に(2)参照
時間の都合を		1		
まとまりを		1		
四つばかりの点数を		1		
段階点という特別の場合いを		1		
名前を		2	(11)(12)	他に(1)参照
なんとかを		1		
せりふを		1		
袋を		1		
舌を		0		他に(3)参照
「地」を		0		他に(8)参照
めりけん粉だけ		1	(16)参照	
赤丸でも赤べけでも		1		
memoもなんにも		1		
そういったことも		1	(17)参照	
名前		2	(13)(14)参照	
めりけん粉		1	(15)参照	
防具		3	ただし連続した発話中	
cooler		2	(20)(22)参照	
televi		1	(24)参照	
助走		1	(19)参照	
「ちゃん」		1		
「 litre」		0		他に(5)参照
「まあ」		0		他に(6)(7)参照

ここからは、次ぎのような予想をしてもよいかに思われる。すなわち、ヲ格は、動詞と熟した表現においては、助詞　を　を伴なって顕現する。そうして、動詞　付ける　と熟したヲ格として、　気　は典型であり、　名前　は言わば半分典型である。しかし、また、次ぎのような予想もすることも可能である。すなわち、ヲ格の助詞　を　は、男性が多く顕現させ、女性が多く顕現させない。　___ガ　___ニ　___ヲ　および　___ニ　___ヲ　の　ヲ格を含めて、

助詞　を　が顕現した	男性の用例数	14	女性の用例数	3
その他の助詞が顕現した		1		3
助詞が顕現しなかった		2		12

であった。　を　でない助詞の顕現したものおよび助詞の顕現しなかったものは、主題化との関係もあるであろう。固より、 II.章 2節2)項に述べたような資料上の制約があり、助詞　を　の有無に関するこの問題には、これ以上立ち入らない。ただし、参考までにいくつか例を挙げる。次ぎは、ヲ格の名詞が　名前　であるもの。(1)をも参照のこと。

(相手：すっとじゃあ team-workが凄いでえ、)　そうそうそうそう。
(相手：名前も凄いけど。)　うん。　(相手：五人の Clydeとかさあ、)　うん。
(相手：なんだっけ、Perry Maisonなんとかさあ、たまげたい。)　名前を付けた。(11)
あれえ、おりに遣いって、名前を付けた。(12)
(男20歳台、大学生、テレビ番組ミニツイテノ雑談、大学教室、同学部生男20歳台)

（相手ガ子供ニ）孝子なんていう名前付けて、(13)
孝行してくれる。　（女40歳台、大学教員、雑談、教員室、同僚女40歳台）
もうねえ恨まれてる。　（相手：どうして？）　皮肉な名前付けて　(14)
くれたわねって言うの。　（相手：ん。）
うちの（子供ノ学校ノ）組みで一番ちびなのね。
（相手：ん、ああ、あ、小さいの？）　そうよ。　（相手：あそう。）
でねえ「たかこ」だなんて。そういう意味じゃないのよって言うんだけど。
（女40歳台、大学教員、雑談、教員室、同僚女40歳台）

(11)(12)の文脈はよく理解できない。(13)(14)は、話し手と聞き手とが交替した、連続した発話である。次ぎは、ヲ格の名詞が　めりけん粉　であるもの。

（相手：あっ、それ、ころっけ？）　あっ、ころっけにしちゃおう。
（相手：うん。）でも、あのお。（相手：いやいや、そのままでもいいけどね。）
そうだ、その方がおいしい。うん、そうだわ、めりけん粉付けて　(15)
揚げた方がおいしいわ。ね。　（相手：ころっけみたいな感じがしたから。）
ううん、hamburgのつもり。　（相手：あっ、それでもいい。）　いや、本当。
（相手：それでもいい。）　本当。　（相手：それでもいい。）　でもね。
ころっけじゃなくてね、だからね、めりけん粉だけばばっばと付けてね、(16)
あのォ。　（女30歳台、大学教員、雑談、家庭、夫30歳台研究所研究員）

次ぎは、ヲ格の名詞が　そういったこと　であるもの。

で、これ（担任児童）を連れて歩かにゃならんということが出てきますから、
そういうとき、一体何をどう見たらいいのか、あるいわ何をどうしたらいいのか、
ということも段段やってかないと、生徒の指導はできませんから、
そういったこともうまく付けて　(17)
やりたい。　（男50歳台、大学教員、社会科教育ノ講義、大学教室、大学生多数）

(17)は、　を　でない助詞が顕現した男性の用例である。ただ、　そういったことも　は　やりたい　の　＿＿ヲ　であり、　うまく付けて　は　やりたい　の連用修飾である、と評価する方がよいようにも思われる。次ぎは、ヲ格の名詞が　差　であるもの。

（皆ガ秋ニ一緒ニ遊ビニ行コウト相談シテイルトコロデ）
（相手：あたしわでも秋わ学会に行くの。）　ああ、ああ、差を付ける。(18)
（女20歳台、研究所研修生、雑談、研修生室、同研修生女30歳台）

(18)は、(2)(8)とともに、格助詞　を　が顕現した女性の用例である。次ぎは、ヲ格の名詞が　助走　であるもの。

こっちがすげえ柔らかいな、この（体操平行棒ノ）barは。
（相手：折ってったって〜。）　助走付けて、(19)
（ナオカツ）止まるんだもん。がくんてちゃってさ。
（男20歳台、大学生、運動クラブデノ雑談、体育館、同クラブ学生男20歳台）

(19)は、後掲の(22)とともに、助詞の顕現しなかった男性の用例である。

格無顕現は次ぎのとおり。

（相手：先生、cooler付けてえ。）(20)
付けるよお。(21)
白川（(21)ノ相手デハナイ人）、付けてよお、(22)
cooler。　（男20歳台、小学生塾教師大学生、授業、学習塾教室、塾小学生女）

（相手：先生、寒いよお、こっちばっかあ、〜）

お前が曩いって言うから付けたんじゃないか。(23)
（相手：じゃあいいよ。）　（同上）

（相手：televi付けないの？）(24)
ん。付けて　(25)
いいよ。　（男20歳台、大学生、雑談、家庭、母40歳台主婦）

アッ、（「図書館学通論」ノ講義ヲ）三回は休んだ。
そうだ、（ソノ成績ガ優デナクテ良デアルノハ）欠席があるからだ。
最初の方が「（図書館学）管理と運用」の方がアァ「通論」の方が、良だったんだ。
「管理と運用」の方は優だもん。欠席で付けんのか。(26)
（男20歳台、大学生、発表サレタ成績、大学教室、同学部生男 4名）

格無顕現は(21)(23)(25)(26)であり、他は序いでを以って挙げたもの、(20)－(22)と(23)とは一連の発話中のものである。(21)および(25)のような、単なる応答の表現意図では、格を顕現させることができないのではないかと思われる。

付けたりとして、受動態　付けられる　および可能態　付けられる　の全例である各 1 例を挙げる。

寧ろ今の理論上の段階でわ、（ココデ問題トシテイル第一強勢ノ部分ニ）
このオ代名詞的要素があってそれが消去されたのでわないか（ト考エラレル）。
そうするとですね、代名詞的要素は第一強勢をもたないわけですから、
マァだからコノエェエェコノうまく、第一強勢が付けられた　（　）
っていうふうにですね言えるとわ限らないわけです。
（男40歳台、大学教員、英語生成音韻論ノ講義、大学教室、大学生）

（妹ノ櫛ヲ使ッテ歯ヲ欠キ、相手：これ取れちゃったの、取れるの？）
～、付けられるんだったら　（　）
くっ付けてえ。　（女10歳台、専門学校学生、雑談、家庭、兄20歳台大学生）

2.　＿＿ガ　＿＿ヲ　まつ　待

用例数35、概要は次ぎのとおり。

＿＿ガ	用例数	1
＿＿ヲ		1
格無顕現		33

主格および対格が想定される他動詞であるにもかかわらず、それらが実際に顕現することの殆んどないものの例である。　＿＿ガ　は、次ぎの被連体修飾語である。

～、稔らない稲を前に、少しでも収穫できたらと、祈るように待ち続ける　（1）
農民もいます。　（ラジオ放送）

ただし、　＿＿ガ　は、呼び掛けと区別のつかないことが多く、次ぎにおいては呼格と評価した。

（床運動ノ）ever-mat入れないで～。（床運動ヲシテイル人：（掛け声）はっはっ）
入れる（疑問）。　（床運動ヲシテイル人：入れたい。）

岩崎（相手、床運動ヲシヨウトシテイル）、待ってて、（2）
everっ。（男20歳台、大学生、大学運動部練習、大学体育館、運動部後輩男20歳台）

ちょっと待ってくだせえなあ、（3）
先生、ちょっと tempoが速過ぎるっちい。
（男10歳台、小学生塾生、学習塾講義、教室、塾教師大学生男20歳台）

（宿題ノ確認デ点呼ヲシテイテ）　から（ソレカラ）柴田。姫野。三谷。中山。
あれ、ちょっと待てよ、（4）
吉田。小林。　（小林トイウ人：はい）　手島。
（男20歳台、小学生塾教師大学生、学習塾講義、教室、塾小学生）

（4）は、呼格ではあるが、それのみで一応独立し、　待つ　とは切り離されていると評価すべきであろう。

＿＿ヲ　は、次ぎの英語の翻訳のものである。

はい、それでわ今度わ日本語で意味をざっと見ていきましょう。
～（英語）、もしもし佐藤さんですか。～（英語）、ええ私ですが。
～（英語）、今日わ佐藤さん。～（英語）、こちらわBen Jonsonですが。
～（英語）、あおはようございます、Jonsonさん。
～（英語）、実は申し訳ないのですが、今この電話で外からの電話を待って　（5）
おりますので、
～（英語）、エェもう少したてばこちらからお電話してよろしゅうございますか？
（男、ラジオ英語講座講師、ラジオ英語講座）

最初の文を除く日本語は、いずれも、直前の　～（英語）　の翻訳である。

格の殆んど顕現していない理由は、（2）（3）（4）から推測し得るように、動詞が依頼ないし命令であるからである。次ぎに、そのような使用をしたものを、前後の文脈および発話者、場面などの情報を省略して、列挙する。既述のものも再掲する。

		待て、待て。		
あやあ、		待て、待て。		
		待て、待てい。		
		待って。		
あは、		待って、待って。		
		待って、	味見。	
		待って、	ひとつお味見ね。	
		待って、	取ってくるから。	
	ちと	待って。		
	ちょっと	待って。		
あ、	ちょっと	待って。		
ふん、	ちょっと	待って。		
	ちょっと	待って、	問題見せて。	
あっ、	ちょっと	待って、	ちょっと貸して。	
	ちょっと	待ってえ。		
	ちょっと	待ってください。		
	ちょっと	待ってくだせえなあ、	先生、	（3）
岩崎、	ちょっと	待ってて、		（2）
	ちょっと	待ってください。	ちょっと並べます。今。	
	ちょっと	待って、	これ書くから。	
	三分	待ってて。		
	ちと	待てよ、	どうしようかなあ。	
あれ、	ちょっと	待てよ。		（4）

最初 3行 6例はテレビ時代劇のせりふであり、最後 2行 2例は自分自身を相手とするものである。それらの際立った形態にも注目してよいであろう。他のものには、そのような特徴的な脈絡あるいは形態はない。構文については、副詞　ちょっと　との共起が注目すべきところである。

格無顕現のもので、依頼ないし命令に関係していないものは、次ぎである。

（電話ヲ掛ケ、先方ガ席ヲ外シテイテ一二分経ッテモ戻ラズ）　ああそうですか、
ええとアノォ結構でございますけれど、もう暫くあと五分ぐらい待って　(6)
みます。（ソノママ待ツ。）　（女30歳台、大学教員、電話、研究所職員）

山田さん（出版社経営）ウゥわ会社破産しちゃったから、
ああら、どうしてわたしが best seller書くまで待たなかったの？(7)
（ト山田サンニ言ッタ。）
（女30歳台、大学教員、雑談、家庭、夫30歳台研究所研究員）

きのうclubの練習があると思ってさ、五六（時限）わ出しただけだったの、聴講罪。
（相手：うん。）　五六七八（時限）つぶして（講義ヲ欠席シテ）待って　(8)
いたら、明夫君が、きょうわ言い忘れたけどきょうわ～ないんだよ（ト言ッタ）。
～ shockがわたし重過ぎて帰れない～。　（相手：～。）　待ってたのよ、(9)
～。　（別ノ相手：明夫君～。）
（女20歳台、大学生、雑談、大学食堂、同学部生 2人トモニ女20歳台）

～、でもね、待っててさ、(10)
七八、ないよなんて言ったらがっかりしちゃうもんねえ。
（女20歳台、大学生、雑談、大学食堂、(9)ノ発話者）

（相手：題しまして「おとうさんおいそがし」の一幕、最後までごゆるりと
御観覧のほど、隅から隅までずずずずういと御願い上げ奉ります。）　待ってました。(11)
（テレビ番組ミノ中デノ芝居）

(8)(9)と(10)とは一連の会話であり、(10)の発話者は(8)(9)に別の相手としたものである。この(10)の　七八　は、　＿＿ヲ　とも評価し得、それによって(8)の　五六七八　もそのように評価し得ることになるが、その(8)によって五六時限から待っていたことが明きらかであるから、七八時限までという意味であると理解して、ここに扱った。(11)は感嘆詞的な形式である。

次ぎは、検討の対象から外したもののすべてであるが、以上の格無顕現の参考になるので、簡略ながら列挙しておく。

ちょっと　お待ちください。
発車まで暫く　お待ちください。
発車まで暫く　お待ち願います。
五分ほど　お待ち願います。
お待たせいたしています。発車わ五十三分です。
お待たせしております。
お待たせしました。
それじゃあアノォこのまま暫く　待たせていただきます。

いずれについても、格の顕現と評価すべきものは見えない。更にこのほかに見られた　待

つ　の関係の語は、麻雀の際の　待ち　2例のみである。

3.　　＿＿ガ　＿＿ニ　＿＿ヲ　　はなす　話

用例数19、うち構文の聴取可能であるもの17。概要は次ぎのとおり。

			用例数
＿＿ガ	＿＿ニ		2
＿＿ガ		＿＿ヲ	5
	＿＿ニ		2
		＿＿ヲ	5
格無顕現			3

引用の　＿＿ト　を伴なうことが想定され得るが、その　＿＿ト　は顕現していない。

＿＿ガ　も、顕現した数は　＿＿ヲ　に次ぐが、単独では顕現していない。　＿＿ニ　および　＿＿ヲ　に注目することとする。

＿＿ガ　＿＿ニ　は次ぎである。

エェ、女の下（ゲ、上中下ノ階層ノ下）の二十（歳）台（ノ人）から
男の上（ジョウ）の二十台え話す　（1）
とき、
この三つ（「ドチラヘオイデマスルカ、ドコヘオイデンノカ、ドコヘクルカ」）の
うちのどれが（待遇表現トシテ）適当であるか、ということを答えて〜。
（男50歳台、研究所研究員、研究所研修講義、教室、研修生約20名）

で、エェ、だれからだれに話している　（2）
というのでですね、エェソノォ一つの場面をォオいろいろ組み合わせてエェいく〜
ますと、そういうこと（分析結果）になってくると考えたわけです。　（同上）

この（1）（2）は、一連の発話中のものであり、待遇表現の調査の概要を解説したものである。　＿＿ガ　と評価したのは、　女の下の二十台から　および　だれから　であり、ともに　＿＿から　である。

＿＿ガ　を伴なわない　＿＿ニ　は、次ぎである。

（相手：まあともかく考えてください。）　はい、あ、じゃ、ほかの人にも
（イマ質問シタ事項ニツイテ）話してみます。（3）
（女30歳台、研究所研修生、講義ノ質問、研究所研究室、講義担当研究員男30歳台）

こんなかっこだったんですので、
ぱっと（怪獣ビバゴント）目と目がアノがっちり合ってもう、
（番組ミ司会者：嬉しかったでしょ。）　まっ、おっそろしいばかりで、
この手を引いてもう必死になって帰って、はあ夫婦で〜の者に話して　（4）
聞かせました。
（女、テレビ番組ミゲスト、ビバゴンニ関スルテレビ番組ミ、スタジオ、司会者等）

（4）は、動詞を　話して聞かせる　と理解すべきであるかも知れない。

＿＿ヲ　は最も多く顕現している。しかしながら、特に　＿＿ガ　＿＿ヲ　の顕現につ

いて、次ぎの ___ヲ の評価および ___ガ ___ヲ全体の繰り返しを注意すべきである。

この場合い（論述上ノ例文、具体的ニハ不明）にわ、
だから、ンン、「わたしがこれから話そうとする (5)
のわ、」とかねあるいわ「あなたが仰しゃったのわ、」っていうのが
遣いってくるわけですよね。
（男30歳台、研究所研究員、発話者ノ論文ニツイテ、研究所研究室、同僚男30歳台）

そういうの（上例(5)この場合いニ同ジイ）っていうのわ、
もしこうくっ付けるとしたら、「わたしがこれから話そうとする (6)
のわ、」とかね「わたしがこれから質問しようとするのわ、」っていうもんが
くっ付くわけでしょ。 （同上）

この場合い（次文参照）だったら、「わたしがこれから話そうとする (7)
のわ、きのうの話しですが、」って言うことわね、おかしいでしょ、やっぱり。
「きのうの話しですが、ひと晩中考えたんだけどやっぱりやめます。」
って言うときにね、「わたしがこれから話そうとする (8)
のわ、きのうの話しですが、」というのをくっ付けるのわ。 （同上）

この３箇所も、一連の発話中のものであり、或る文の意味にプラグマティクな説明を与えた発話者自身の論述について、相手の質疑に答えたものである。 ___ヲ と評価したものは、いずれも、 私がこれから話そうとする の修飾する形式名詞 の である。

以上のほかの ___ガ ___ヲ は次ぎである。

（日本語ノ授業デ聞カセラレタ、先生自身ノ吹キ込ンダ録音ニツイテ）
すうごく速くってねえとにかく～聞いても判んないのよ。だから二三回かけてねえ。
（相手：ええ。） 先生、時どきねえ、なに話してたのかなあ。(9)
（女20歳台香港、大学留学生、
雑談、大学教員室、話題中ノ先生デナイ大学教員女30歳台）

___ヲ 単独のものは次ぎのごとくである。

まあ自信がなくて教える～。それでしたらやはり生徒に習って～。
そこで～そ挿話的にいろんなことを話す (10)
ということもありますけれども、やはり～方がいい～。
（男50歳台、大学教員、社会科教育ニ関スル大学講義、大学教室、大学生多数）

先ず第一番に、～ですから、郵便局に行ってエェ電報用紙を買うということ、
～（荷物ヲ）店に預けてもらえるということを話した。(11)
（同(1)）

（聞キ手ノ担当デナイ講義デ）最初の方に一番最初に、
日本児童文学のアレ研究してんのわ文学学会ってのと（相手：うん。）
文学者協会ってのわあるからって。（相手：あると）で雑誌わこういうのがあって
（相手：ふうん。） っていうふうなこと（講義ノ先生ガ）話して。(12)
（男20歳台、大学生、或ル講義デ聞イタコト、大学教員研究室、大学教員男30歳台）

きのう言われちゃったよ。大谷さんの友達がもう先生やってるんだってね。
（相手：うん。）そしたらね、なにが嫌いとかどうとか、食べることばっかり話す (13)
って。給食なんか絶対残しちゃだめだって。（相手：ふうん。）
（女20歳台、大学生、雑談、大学内売店、大学同学部生女20歳台）

マ最初なに（カラ）遣いるかわ、謂わゆる社会科というのわどういう科目なのか、
どういった内容を学ぶのか、というようなマァ概説的なことをお話し ( )

してみたい。で、（今後ノ講義ハ）
社会科っていう科目わ一体どういう性質の科目であるかといったようなことを
なん回かやって、マその次ぎにマァ具体的なマァ教材研究をやりますけれども、
マァ政治の分野あるいわ経済的な分野あるいわ歴史的な分野というのわ、
これわ或る程度本を読めば割り合い容易にそして〜、〜結果
ソノ現場について話して　(14)
みると、やはりコウ一番苦手なのが地理的な分野のようです。　（同(10)）

(11)の文脈は、録音からはよく理解できない。　預けてもらえる　は　預けてもらう　、話した　は、調査者に依頼したという意味であるとも思われる。(12)は、(9)とともに、格助詞　を　が顕現していないであろうと見られる例である。　(13)も同じく格助詞が顕現していないが、副助詞　ばかり　がある。(14)については、　その現場について　を　＿＿ヲ　と評価した。(14)と(10)とは一連の談話中のものであり、(14)が先行する。

格無顕現は次ぎである。

（発話者ト相手トノ共通ノ友人ハ）どこにいるの。　（相手：うん。）
（話題ノ友人ガダレカト話シヲシテイルノヲ見付ケテ）　話してるの？(15)
（同(13)）

光（相手ノ名前）、お二階からmamaにお話ししないのよ。（　）
大きな声で話しちゃ　(16)
いけないでしょ。　（女30歳台、大学教員、雑談、家庭、長男 0歳台）

で、エェまこういうウいままでお話しした　（　）
ことが、すべてソノォ発話をするという場面から見詰めたのでありまして、
エェ言語行動にわ、まそこにわソノ聞くというものがあって、これもまあ話す　(17)
ことに劣らない重要性をもっていると言ってエェよかろうと思います。　（同(1)）

(16)は、命令形式であるから、　＿＿ガ　が顕現しないことが原則である。(17)は、純然たる動詞用法ではなく、名詞性を帯びたものである。

お話し　という名詞的な使用の一部の例は、上に参考例として挙がった。　話せる　が2例見られたので、次ぎに挙げる。ほかに　話す　に関係する動詞用法は見られない。

（発話者ト相手トノ共通ノ知人ガ友人ヲ得タコトニツキ、）　duitsch語話せる　（　）
ってだけで、（友人トシテ）いいんじゃない？
（男30歳台、大学院生、雑談、大学学生研究室、同科院生男20歳台）

じゃ（相手ガ録音シテイル調査ガ九時ニ終ワルカラ）、九時過ぎたら話せるな、（　）
freeに。　（男20歳台、大学生、雑談、電車内、同学部生男20歳台）

4.　＿＿ガ　＿＿ニ　＿＿ヲ　おしえる　教
＿＿ガ　＿＿ヲ　おしえる　教

＿＿ガ　＿＿ニ　＿＿ヲ　は　人ガ　人ニ　物ヲ　を典型とし、　＿＿ガ　＿＿ヲ　は　人ガ　人ヲ　を典型とする。このふたつの顕現について述べる。しかしながら、総用例数40、そのうちで後者の型に属すると認められるものは、 2例、すなわち

エェトアノ、（英語　deaf and dumb teacher ノ強勢ノ、異義ニヨル相違ニツイテ）
「聾唖の先生」っていう（意味）のと　（相手：あ。）　「聾唖を教える　（1）
先生」っていう（意味）ので、～（形態上ノ）bound をアノ～、（相手：はあ。）
「聾唖の先生」を二二一（トイウ強勢配置）で、から、「聾唖を教える　（2）
先生」の方を、　（相手：三一二ですか、）　ああ、　（相手：アァじゃない。）
（男20歳台、大学生、英語生成音韻論ノ講義、大学教室、講義担当教員男40歳台）

のみに留まる。したがって、本節は、事実上、　＿＿ガ　＿＿ニ　＿＿ヲ　教える　に費やされる。ただし、次ぎおよび後述の格無顕現のものは判定を留保してもよい。

特Ｂ（トイウクラス）も（漢字ノ試験ノ成績ノ悪イ人ガ）いるんでしょ？
（相手：なにが？）　特Ｂも～（相手ガ担当シテイルノデハナイカ）？
（相手：違うよ、一Ｂだよ。（コノクラスノ試験ノ成績ハ）ひっでえもんだな。）
なんで、先生、特Ｂ教えないの。（3）
（相手：エェ特Ｂ、そんなとこまで～回ってこないんだよ。）
ああ、（相手ノ）頭～（ノ問題）、やっぱし。先生、一般Ａ教えないの？（4）
国語（科）。　（相手：エェ、やってるよ。）
（男10歳台、小学生、学習塾デノ雑談、事務室、塾教師大学生男20歳台）

問題は（3）である。（4）について、倒置ながら、　＿＿ヲ　と評価するのがよい　国語が顕現していて、都合　一般Ａ　を　＿＿ニ　と評価することになり、それに準じて、（3）についても、　特Ｂ　を　＿＿ニ　と評価することとなった。

なお、　教える　には、　話す　と同様に、　＿＿ト　を想定することができるのであるが、その顕現らしきものは、

例えば、日本語で、これマァ「青い」というのを実際にわマ日本語で言うんだから
その観念をここで教えて　（5）
いいかどうか、ソノォ greenも青と言うんだということを教えて　（6）
いいかどうか、そういうそういう問題わまた別として、
仮りにここでわ「青いtomato」ということばが出てくるんだったら、
そして現実にわソノ緑色のtomatoを、（ココニ扱ウ日本語教材ノ）絵に出ている、
それを実際日本人わ「青いtomato」と言うわけですから、
それわ「青いtomato」として教える　（7）
ことわ、意味があると思います。
でも現実に絶対に出くわさないような「黒いtomato」っていうのを教えても、（8）
やはりせっかく暗記するんですから、
ソノ暗記するって言うか、厭でも応でも videoで見せられて覚えるんですから、
アノォ絶対に出てこないようなのを覚えなくたって、
或る程度出てき得る状態、応用の利く状態を覚えた方がいい。
「黒い椅子」ならいいです。
（女30歳台、研究所研修生、研修講義中ノ発言、教室、講義担当研究員男30歳台）

の（7）の　「青いtomato」として　のほかには見えない。この（7）については、　それわを　＿＿ヲ　の顕現として評価し、主要な格としてはそれのみが顕現しているものと評価した。この　それわ　は、或るいは、　「青いtomato」として教えることわ　と同格であるのかも知れない。

＿＿ガ　＿＿ニ　＿＿ヲ　教える　の用例数37。概要は次ぎのとおり。既出の用例についてはその分類のいずれに属するかを示す。

			用例数		
___ガ	___ニ	___ヲ		1	(4)
___ガ	___ニ			1	(3)
___ガ		___ヲ		4	
	___ニ			1	
		___ヲ		19	(5)(6)(7)(8)
格無顕現				11	

ただし、次ぎには　___ニ　を認むべきであったかも知れない。

なんかアノォ地方のことばってね不断例えばそんなに正しくない。
〜（相手名）先生みたいじゃなくって、なんか。（相手：ああ方言が遣いってる）
んん。（相手：わけね、たくさん。じゃあ難しいでしょう、上級（ノ授業）で。）
でもああいう（日本語上級ノ授業デ知ッタ）話し方あるね。あったかなあ。
（相手：あれ（自分ノ担当）わ中級だから。上級の方わもっと難しいでしょう。）
それ、正しい日本語教えて　(9)
くれるわけ。上級わね、正しくない日本語を教える　(10)
わけ。　（女20歳台香港、大学留学生、雑談、大学自習室、大学教員女30歳台）

ああ、三浦さん来れないからね、ちょっと鈴木（相手デナイ第三者）来たら教えて　(11)
やってくれないかって（三浦サンニ頼マレタ）。　（相手：えっ。）
鈴木来たら教えて　(12)
やってくれないかって。　（相手： duitsch語（疑問）。）　うん。
（相手：うん。）　（男20歳台、大学院生、雑談、大学研究室、同科院生男30歳台）

(9)(10)については、(9)の　それ　および(10)の　上級わね　が問題である。一応、ここでは、いずれも、その授業においてという解釈をし、(9)の　それ　も中級の授業を指示するものと解釈した。したがって、それらを主要な格として評価せず、(9)(10)ともに　___ヲ　のみ顕現したと評価した。(11)(12)については、ともに　鈴木　が問題である。これと一連の会話のこの後の方に

でも四時半ぐらいですよ、どうせ、（研究会ガ）始まるのわ。
（(12)ノ三浦サン：だからそれより先に鈴木が来たらね、）
((11)(12)ノ相手：ええ。）　（三浦： duitsch語教えて　(13)
やって。）　((11)(12)ノ相手：はいはい。）
（同上、タダシ新タニ加ワッタ三浦ハ大学教員男40歳台）

というものがあることもあり、ここではともに　来たら　の　___ガ　と評価して、(11)(12)はともに格無顕現と評価した。

___ガ　___ヲ　は次ぎである。

（「回答、解答」ノ例トシテ学生ノ作ッタ文ヲ批評シテ）
で、も一つ（「解答」ニ関スル例文「先生は学生の質問に詳しくて解答する」）、
「先生は学生の質問に詳しく」、「て」は要りません、「解答する」。
この場合いィわ、これわどっちも（「回答」モ）使えそうですねえ。
その class（授業）の内容に関係があるとか、先生がアノその解答を教えて　(14)
上げます、そういう意味で使ってもいいし、
ただ答えるという意味だったらこちら（「回答」）でもいいですね。
（女40歳台、大学教員、日本語ノ授業、大学教室、留学生25名）

あのォウウゥンウッなんて言うかな、こういう補助教材作ったから、
い種いろな人に使ってほしい、種いろな場所で使ってほしいってするとなると、
アノォ（ソノ教材ニ現ワレル）「ここです」ってのわ、先生もうひとつ教えないと、(15)
学生が判らないことになっちゃうのかな、とか思ったんだけどね。
（男30歳台、研究所研究員、質問ヘノ応答、研究所研究室、研究所研修生女30歳台）

「もしもし傘をお忘れじゃありませんか。」という～
「～お忘れですよ。」という言い方とどちらがいいかと言いますと、
「お忘れじゃありませんか」というのわ
否定～否定的であってもエー応コノォオ尋ねるという形式である。
「お忘れですよ」というのわマァそれを忘れたんだということを教えて (16)
いるわけです。
（男50歳台、研究所研究員、研究所研修講義、研修教室、研修生約20名）

そうする（相手ノ一般的説明ニ従ウ）と、これ（文例、具体的ニハ不明）わ、
あなたが教えて (17)
くれたのわ、あなたが指示したのわ、あそこですね（ト説明サレルカ。疑問）。
（男30歳台、研究所研究員、相手ノ論述ヘノ質問、研究所研究室、同僚男20歳台）

(15)の ＿＿ヲ は 「ここです」ってのわ 、(16)の ＿＿ガ は 「お忘れですよ」

というのわ であると評価した。いずれも主題化されている。(16)の ＿＿ガ は人では

ない。(17)の ＿＿ヲ は形式名詞 の であると評価した。被修飾語である。

＿＿ニ は次ぎである。

（日本語ノ教授ノ方法ニツイテ、）例えばアノこそあどの（教授ノ）場合いでも、
アノォこれわ実際にあったことですけれども、
或るゥソノォひとつの学校の生徒とかひとつの groupに教える (18)
場合いに、或る先生わ距離で入れ、
それから或る先生わハァソノ領域で入れたということが、実際に起きています。
（男30歳台、研究所研究員、研究所研修ノ日本語教育ノ講義、研修教室、研修生約20名）

ここの こそあどの場合いでも を構文上の ＿＿ヲ と評価することは無理であろう。

＿＿ヲ については、既出のもののほかに注意を要するもののみを挙げる。いずれも

＿＿ヲ の主題化に関係する。

（奨学金関係書類ヲ作成シヨウトシテ奨学番号ヲ忘レテキタ者ニ、ソレヲ調ベテ、
相手：じゃ恐れ入りますが、） はい。
（相手：こちら（必要書類）をお書きになって出していただきます。）
ああそうですか。そすと番号わァいま教えて (19)
いただくわけにわいきませんでしょうか。アノ。
（女30歳台、大学院生、事務、大学事務室、事務員女30歳台）

（相手：ん。三百六十掛ける二、） ん。 （相手：割る十二か。） ん。
（相手：こんな難しい計算、だれが。） アノ暗算でやるやり方、教えて (20)
あげようか。 （相手：ん。）
（女40歳台、大学教員、子供ノ宿題ノ指導、家庭、長女10歳台小学生）

なんでか教えて (21)
あげようか。 （相手：ん。）
（女10歳台、小学生、料理ノシ方、家庭、母40歳台大学教員）

(19)は助詞 わ を伴なっている。このようなものはほかには既出(7)(15)のみである。

(20)(21)は助詞を伴なっていない。このようなものはほかには既出(4)(9)(13)のみであ

る。顕現が単独でないものをも含め、　＿＿ヲ　は、以上および(17)の被修飾の場合いのほか、15例において格助詞　を　を伴なっていると認められる。なお、(20)(21)は、一連のものではないが、話し手と聞き手とが交替したものである。その(21)の　なんでか　には、　＿＿ト　と評価する可能性があるかも知れない。ただし、その　なんでか　がなにについてなのか、文脈が判然としない。

格無顕現について、次ぎは行為の単なる命名の色彩の濃いものである。

これ（英語　deaf and dumb teacher）わアノなぜ名詞と考えているか。
例えば science teacherね、 science teacherとparallelであるからソノ「教える」(22)
っていう〜、エェソノ一種の名詞〜。　（同(1)(2)）

ですから例えば（講義題名トシテ）教材研究と申しましても、まああらゆる分野〜、
皆さんに、教える　(23)
気持ちになって〜。
（男50歳台、大学教員、社会科教育ノ講義、大学教室、大学生多数）

ね、アノォ教える　(24)
ときにね、（相手：え、）どういう順序でどういう〜本〜。
（女30歳台、大学教員、雑談、大学研究室、同僚女30歳台）

（約束ノ断ワリノ）電話をするの、また忘れてきちゃった。
（相手：んふふ。やっぱり、さっき言ってたのにねえ。）　きょう、教える　(25)
約束したのよ、だけど。　（相手：あたしがね。）　んふふふ。そうそう。
（女30歳台、研究所研修生、雑談、研修生室、同研修生女30歳台）

次ぎは、依頼の表現である。依頼であっても　＿＿ヲ　を伴なった、(13)もある。

田中さん、　（相手：はい。）　ちょっと教えて　(26)
いただけますか。　（相手：はい。）　（同(17)）

この「あすこですね」わ、ウだめ（相手ノ論述ノ中ノ或ル分類項目ニ不適）ですね？
（相手：違いります。）　違いますか？　（相手：違いります。）
ええっと、教え教えて　(27)
ください。　（同(17)）

あん畜生の噂をォ聞いたら、直ぐに教えてェ。(28)
地球の果ての町までも逮捕に向かうつもりよォ。　（歌謡曲）

次ぎは、命名あるいは依頼に関係していないと思われるもの。

でエェそういうことですから、と言っても、実際（教育ノ）現場え行けば、
皆さん嫌いなような四年生持てば、いやでも郷土のことを教えなければ　(29)
〜。と言って郷土のこと自分でわ全然知らないのでわ、生徒から教わる　(　)
〜。まあコノォいろんなコノ資料を使って
graph書いたり図を書いたりいうとなると、全くお手上げである〜。
まあ先生〜地元のことを知らなくても、
あるいわマァそういった〜統計などを作ったことがない〜であれば、教えられる　(　)
はずがない。まあ自信がなくて教える　(30)
〜。　（同(23)）

そのときにアノォ「どれが茶色の鉛筆ですか」っていう聞き方と、
「茶色の鉛筆はどれですか」っていうマァアいろんな鉛筆たくさん並べといたのと、
どちらをするかっていう問題になってるんだと思うんです。でどちらかで教えて　(31)
やっているのが、多分それでだけど〜それわ割り合い早い時期。

（男20歳台、研究所研究員、議論、研究所研究室、同僚男30歳台）

(29)は　＿＿ヲ　の例である。

可能態と　教わる　とがそれぞれ 1例挙がった。次ぎに、　教えてない　とそれらとを簡略に補っておく。

あれえ、未だ「ます」が教えてないからだったんじゃないの。（　）
（男60歳台、研究所研究員、日本語教育ノ会議デ、研究所会議室、関係者 4名）

そうしなければ日本語を教えられないと、（　）
エェ結論ですがどうでしょうか？
（女30歳台、研究所研修生、研修講義中ノ議論、教室、講義担当研究員男30歳台等）

笑いっていうのわ、意外、
つまり予期していたものに対してソノ意外だと笑いが起きるっていう説も、
どこかにあったと思いますけれども、
ただ意外だとことばわ意外だと教えられないから、（　）
そこの矛盾をどうするかっていうことがあると思うんですけれども。　（同上）

お料理も石井君に教わった　（　）
～。（女20歳台、大学生、雑談、大学食堂、同学部生女20歳台 3名）

教える　の動詞用法は、　＿＿ヲ　の一部が数値のみであったほか、以上で全例に言及したことになる。

V.　結論

現代の標準的な日本語の話しことばにおいて、動詞に対し、その主要な格の関係に立つ語句は、その同時に顕現するし方が、動詞個個において決定している、という、I.章2.節に呈示した命題は、IV.章の記述によって、それはあまりに細やかなものであるが、一応実証の端緒を与えられたものと考える。それは、当然、本報告の当初の命題を実証したことにも繋がっているわけである。それでは、こうした命題が真であるとして、その命題の意味するところはどのように解釈され得るか、そのことに触れておく。

動詞に対し、その主要な格の関係に立つ語句は、その同時に顕現するし方が、動詞個個において決定している、という命題は、IV.章の記述およびその他の検討を踏まえて、些か乱暴ではあるかも知れないがいま少し積極的な意味を与えるならば、主要な格は同時には高だか1個しか顕現しないということになる。顕現する格が1個であるか0個であるかは、動詞個個に即して考えるしかない。ただ、それが1個である場合いには、自動詞に対しては　___ガ　であり、他動詞に対しては　___ヲ　であるという可能性が強くなるであろう。

その　___ガ　ないし　___ヲ　のようなものは、動詞の意味に取り込まれているほどに動詞と密接に関係しているのではないかと思われる。そのようなものがない、すなわち顕現する格が0個である動詞は、意味上独自に完結しているということになる。このような解釈は、顕現している格が、情報伝達に際して情報として不可欠であるから顕現したという、恐らく一般にあるであろう考え方とは、対極をなすものである。しかしながら、例えばその文のみからでは意味を理解するのが第三者に困難であることの多い話しことばについては、ここに示したような解釈のほうが適わしいように思われる。もっとも、情報として不可欠なものが、　___ガ　なり　___ヲ　なりに集中する、という反論はあり得るかも知れない。それについて吟味する余裕はいま持ち合わせていない。

ここに示した解釈に、問題がいくつかある。或る動詞が顕現させる高だか1個の格をその動詞の固有の格と言うことにする。第一、動詞固有の格を、同一動詞に一様に常に決定し得るか。この問題は、類義異構文という概念によって回避される。第二、動詞固有のものでない格の顕現は、どのように説明されるか。この問題は、今後の課題として残る。それこそ脈絡の構成すなわち不可欠な情報の補完ということであるかも知れないが、そう単純でもないようである。

このような解釈の問題はあるが、本報告に実証の端緒を与えた命題そのものないしその意味は、III.章4.節にも言ったように、文法それ自体として構文に課されている制約であり、本研究によって得られた恐らく最も大きい知見である。言語運用に際して許容されない「破格」の構文に対して、「正格」の構文とは、そのような文法的制約とIII.章4.節のような脈絡的制約とについて適格である構文である。

付.　言語資料のパーソナル＝コンピュータ処理

本研究においては、資料処理をパーソナル＝コンピュータを用いて行なった。分析をパーソナル＝コンピュータを用いて進めた、と言う方が適切であるかも知れない。

用いた機種は、富士通MB25020 言語F-BASICv1.と日本電気PC-8001 言語N-BASIC との２系列である。２系列の機種を使用したのは、次ぎのような事情による。すなわち、本研究開始前、日本電気系列のシステムを揃えていて、それによる研究上の蓄積も既に少なからずあった。本研究開始後、暫くはその利用の蓄積を踏まえて日本電気系列を使用していたが、その蓄積が密接に関係していた研究に至急の要が生じ、本研究は、導入を開始していた富士通系列によって進行させるのが適当であると判断された。このような事情のため、２系列の機種を使用することとなったが、本研究の本格的な部分は富士通系列に負う。

本研究においては、動詞に対する格の顕現の諸相を言わばゼロから検討するため、話し手および聞き手の性別・年齢・職業、両者の関係、場面、話題、照応などの言語的脈絡謂わゆる文脈、動作などの非言語的脈絡、といった種種の情報を言語自体に付加し、かつその有効性に従って情報を頻繁に添削しなければならなかった。そのことは固より研究の計画段階から予測されていて、そのゆえにパーソナル＝コンピュータの利用が計画に盛り込まれた。大型コンピュータに対してパーソナル＝コンピュータのもつ諸機能は、本研究に適していると考えられたのである。その利用は、一応成功したように思われる。

本研究に用いたプログラムをここにリストすることも考えられたが、次ぎの事情によって行なわなかった。すなわち、プログラムは、モジュールごとに細分された、そのひとつひとつは簡単なものである。簡単なものであるから、公表に至急を要しない。また、使用に際しては、必要なものを MERGE命令で結合し、必要な変更および一部の変数入力を直接にプログラムに対して行なう。エラー処理などのルーチン化はない。こうした使用条件からするならば、このプログラムは相当の改訂を加えなければならない。このプログラムには、猶お今後用いる研究計画もあるので、そうしたところでの使用および改訂を経てから公表することとした。

研究成果の概要　　話しことばの構文の記述に関する日本語教育学的研究

話しことばの構文の記述に関わる問題点を明きらかにするため、特に、動詞を述部とする構文において、諸要素がどのような制約を受けて顕現しているのか、という観点から、昭和52－54年度特定研究「日本語教育のための言語能力の測定」（代表者野元菊雄）のものを中心とする資料について、検討した。その用例の分析には、パーソナル＝コンピュータを利用した。

得られた知見は、話しことばにおいて正格であると評価される動詞構文についての、次ぎのような特徴である。

1．動詞に対して同時に顕現する格は、動詞それぞれにおいて決定されていると考えられる、強い偏りを見せる。
　(1) その偏り方は、量的には高だか１であると見られる。
　(2) 質的には、動詞ごとに個性があるが、強いて言うならば、量的に１であるとき、自動詞で多くガ格、他動詞で多くヲ格であるようである。

2．1．の文法的制約に、運用の際にさらに脈絡の制約が加わる。
　(1) 単に応答をするような表現意図・文脈は、格を全く顕現させない効果をもつと見られる。
　(2) 現物を指示するような随伴行動は、指示詞による格に効果を及ぼすと見られるが、その格を顕現させる場合いも顕現させない場合いもある。
　(3) 原稿を用意していない講義のような場面は、構文を複雑化し、動詞と格との関係を混乱させることがある。発話者の個性によるかも知れない。

以上のような特徴に留意した日本語動詞構文の記述は、言語運用を重視する日本語教育に資するところが大であると考えられる。

研究報告書　　動詞に対する格の顕現　(1983)

ABSTRACT of PROJECT

A Study of Sentence Structure in Spoken Japanese for Teaching of Japanese

The study aimed at the elucidation of the sentence structures in spoken Japanese. The focus was given to the sentence structures formed with verbal predicates in which overt elements besides the predicate would suggest some constraints. The spoken material examined in the study is the material obtained in the previous researches. A personal computer was used in the data processing.

The findings characterize the appropriate sentences with verbal predicates in spoken Japanese as follows:

1. Co-occurrent, overt cases tend to be specific to the verb in the predicate.
   (1) The number of overt cases stays within one at most.
   (2) The type of the overt case depends on the predicate verb in a given sentence. In general, however, the nominative appears with intransitive verbs while the objective appears with transitive verbs.
2. The general rules cited in 1 may have contextual constraints.
   (1) Overt cases are not used in a context where the sentences intend to convey the speaker's mere understanding or concent.
   (2) The non-verbal behaviour which points the concrete objects tends to affect the overt cases represented by demonstratives.
   (3) Situational contexts such as giving lectures without prepared notes tend to complicate the syntactic structures and confuse the relations of predicate verbs and overt cases. This might be speaker specific phenomena.

The above mentioned description should greatly contribute to the teaching of Japanese as a foreign language, which attaches a great importance to the ability of performance in Japanese.

REPORT　Verbs and Overt Cases in Spoken Japanese　(1983)

文部省昭和56－57年度科学研究費補助金による一般研究（B）　課題番号56450054

話しことばの構文の記述に関する日本語教育学的研究　研究代表者野元菊雄

研究報告書　動詞に対する格の顕現

１９８３年３月３０日　第１版印刷　１２０部
１９８３年３月３１日　第１版発行　１２０部

著作権所有　国立国語研究所
東京都北区西が丘三丁目９番１４号
著作管理　野元　菊雄　・　石井　久雄

発行　国立国語研究所日本語教育センター
東京都北区西が丘三丁目９番１４号

本報告書は改版ごとに増補改訂する予定です。
本報告書の入手については著作管理者にお問い合わせ下さい。